

## 外来がん化学療法への薬剤師の関わりとその成果に関する研究

近年、がん治療における進歩は目覚ましく、さらに、副作用対策や支持療法の発展によって抗がん剤による治療は入院から外来治療へとシフトしています。しかし、がん化学療法において副作用はほぼ必発されると言われ、外来患者では副作用が自宅で発現した時の対処法や治療中における生活指導などについて説明し、患者さんには十分に理解してもらわなければなりません。

したがって、外来がん化学療法において薬剤師が積極的に関わる必要が高まっており、抗がん剤の混合調製だけでなく、患者さんへの治療内容の説明、治療中の生活指導、副作用モニタリング、副作用対策などを実施する施設が多くなってきました。当院では、2008年4月に薬剤師2名を外来がん化学療法室に常駐し、患者さんの指導や説明、処方提案などに関わってきました。また、2010年4月には薬剤師3名常駐体制とし、全患者さんへの説明、お薬手帳への抗がん剤内容、副作用状況、副作用対策、血清検査値などの情報の記載を行ってきました。さらに、2011年4月からは、患者さんが来院後、採血して診察を受けるまでの待ち時間を利用し、診察前患者面談を始めました。

こういった薬剤師の取り組みを評価するために業務データをまとめ、論文として報告しました。

薬剤師の業務内容は図 1-24 に示したとおりです。常駐後の指導患者数は初期の頃は月当たり 100 人前後でしたが、2009 年には 200 人と倍増し、費やした時間は年間 1,900 時間近くでした（図 1-25）。薬剤師 3 人体制になるとさらに指導患者数が増え、ほぼ全患者さんへ関われるようになり、費やした時間は年間 2,100 時間を超えていました。処方提案はほとんどのケースで支持療法に関するものであり、初期の頃は少なかったのですが最近では月 100 件を超えるようになり、また、提案採択率は 90%を超えていました。

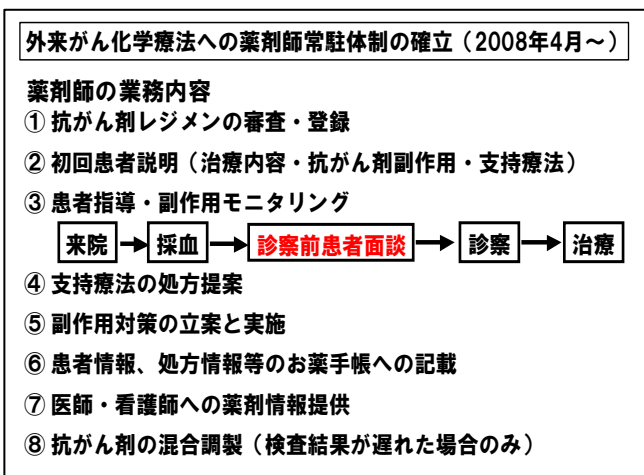


図 1-24. 岐阜大学病院外来がん化学療法室における薬剤師の業務内容

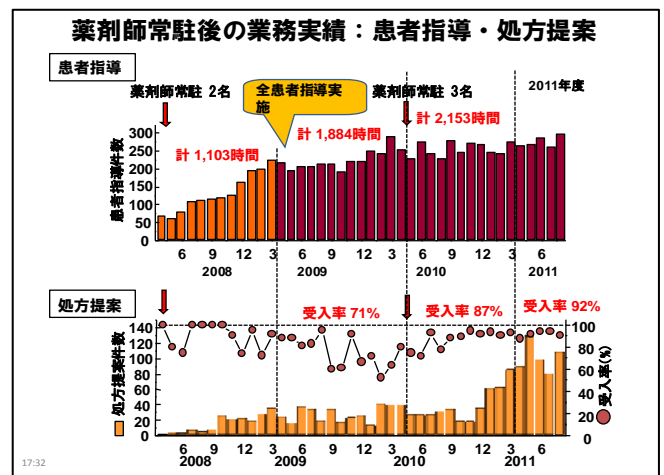


図 1-25. 外来がん化学療法室への薬剤師常駐後の指導患者件数と指導時間および処方提案件数と提案採択率の推移

薬剤師常駐前の抗がん剤調製は全体の60%程度にしか実施していませんでしたが、常駐後は全患者さんの調製を行い、その結果、調製件数は1年目は1.9倍、2年目は2.3倍、3年目は2.1倍になりました(図1-26)。全患者数は、1年目には前年の1.4倍、2年目は1.9倍、3年目は2.1倍と年々増加し、その結果、外来化学療法室における医業収入は、薬剤師常駐前が1.28億円であったのが、1年目には2倍に増加し、2年目は3.1倍、3年目は3.6倍まで増加しました。

薬剤師が常駐し、年間2,000時間以上患者さんの指導や副作用対策、処方提案や患者さんの状態の記録といったことに費やすことにより、医師や看護師の負担が軽減され、診療抗率が向上した結果、より多くの患者さんの治療が行えるようになり、病院経営的にも貢献できたという結果に繋がったと考えられます。

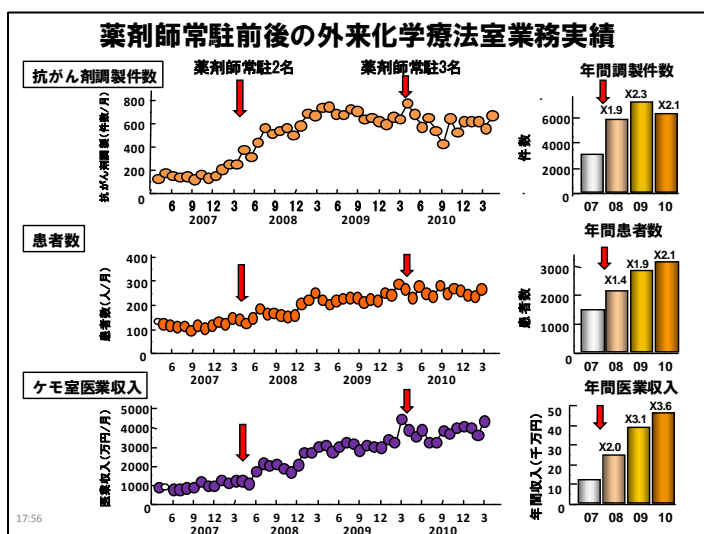


図 1-26. 外来がん化学療法室への薬剤師常駐前後の抗がん剤調製件数、患者数、医業収入合計の比較

### [発表論文]

- 1) Iihara H, Matsuura K, Ishihara M, Takahashi T, Kawaguchi Y, Yoshida K, Itoh Y. Pharmacists contribute to the improved efficiency of medical practices in the outpatient cancer chemotherapy clinic. *J Eval Clin Pract* 2011 (doi: 10.1111/j.1365-2753.2011.01665.x).